百々裏話（37）

おもて　あきら

〔謡曲作者付の色々―その六―〕

昨年の「百々裏話」で、五回（1・2・6・7・9月）にわたつて、元禄謡本作者付・諷指南作者付・謡曲作者備考・金春作者付の四種類の作者付を紹介し、その性質についても言及してきた。少し間が離れ過ぎてしまつたが、もう一種類だけ紹介して、未翻印作者付の考察を今回で終ることにしたい。

(5)大蔵作者付

法政大学能楽研究所に、金春座の別家格であつた大蔵大夫（大蔵庄左衛門）家から後援者であつた仙台藩主へ伝えた伝書一箱が所蔵されているが、その中に「能之書付」と包紙に墨書した作者付一通が含まれている。奥書が無いが、もと一群の伝書中にあり、分離して鴻山文庫蔵となつている同一内容の巻子本の作者付（上質鳥子紙を用いた美本）には、

右うたひの作者附者今春大蔵於両家代々秘密極伝之習イ也　全ク嫡流之外門弟等ニ夢々不相伝書付也　大蔵庄左衛門入道常休　専考綱村朝臣奉伝授候所也　予手自写之為一巻畢

享保五年弥生中旬　左中将吉村（花押）

と、伊達吉村の奥書がある。この鴻山文庫蔵の吉村自筆本が能楽研究所の本の転写と認められるから、研究所の本が、大蔵庄左衛門入道常休から伊達綱村へ贈つた原本なのであろう。大蔵家伝来の作者付であるから、「大蔵作者付」と仮称しておきたい。

この大蔵作者付は一五五曲の謡曲の作者付であるが、そのままの形では翻印できない面があるので、説明の形で内容を紹介しよう。

まず冒頭に、金春禅竹（氏信）作として次の33曲を列挙している。

高砂。老松。西王母。佐保山。源太夫。賀茂。田村。真盛。朝長。忠度。八嶋。烹北。松風。熊野。井筒。江口。野々宮。源氏供養。柏崎。百萬。角田川。三井寺。当麻。誓願寺。芦苅。山姥。邯鄲。昭君。羽衣。龍田。自然居士。道成寺。猩々。

そのあとに、禅竹の子の元氏宗印と、その子の元安禅鳳と、禅竹の三男と注する大蔵道加の手に成る曲95番が列挙されているが、三人の分が混在しているのを別々にまとめて示すと次の如くである。

弓八幡。御裳濯。鵜祭。箱崎。岩舟。東方朔。鶴亀。放生川。室君。養老。簸。吉野静。楊貴妃。芭蕉。通小町。葛城。雨月。杜若。春日龍神。大會。女郎花。七騎落。花月。小塩。小督。横山。天鼓。黒塚。是我意。舎利。橋弁慶。哥占。鶏立田。車僧。空八行舟。法花会。初雪。関寺。（以上38番宗印作）

呉服。淡路。富士山。吉野。鵜羽。白髪。清恒。恒正。道盛。千寿。定家。玉葛。富士太鼓。卒都婆小町。三輪。唐舟。国栖。西行桜。葵上。土車。盛久。藤永。安宅。融。藤戸。一角仙人。野守。殺生石。紅葉狩。鍾馗。現在鵜。土蜘。舟弁慶。熊坂。舟橋。壇風。太刀堀。鵜飼。碇潜。籠妓王。愛染川。伯母捨。谷行。（以上43番禅鳳作）

金札。嵐山。竹生島。白楽天。知章。兼平。采女。二人静。浮舟。籠太鼓。海士。錦木。鵜。項羽。（以上14番大蔵道加作）

右の85番は、列挙の前に「此数能、此三人相談ニテ作ル」とあり、末にも「是迄ノ能宗印道加禅鳳三人作ル尤相談モ有たるよし聞」とあるから、必ずしも一人を作者に決めてしまつているわけではないらしい。

また、これまでに掲げた曲名には注記の附されたものがあり、高砂には世阿弥が相談に加わつた由を言い、江口・山姥・邯鄲には「一休相談ニ加ル」、御裳濯・箱崎・横山・鶏竜

田・法華会・初雪・関寺・碇潜(碇潜か)には「能うたひ共にすつる」(またはそれと同意の注)、哥占・太刀堀・伯母捨には「能斗すつるうたひをゆるしのうたひとす」、籠妓王・愛染川には「能うたひ自然有之」、富士山に「うたひ斗自然有之」、吉野に「自然有之」、鵜羽に「近代すつる」、是我意・空八行舟に「名ノ書称は一休」、定家に「うたひノ詞ハ観世ニ作、ふしト能ハ禅鳳付ル」とある。

さて、前述した三人作の分のあとは、全文を掲出しておこう。

生田。六浦。沢瀧。

此三番、禅鳳息子ノ宗随奏氏照ノ夢中ニ見テ作ル。沢瀧ハ能うたひ共ニすきと仕すつる

放下僧　禅鳳拍子方ト相談有之テ能ニ可仕由ニ候得共、終ニ今春方ニ今迄一度モ此能不仕

橘　此能八良禅曲安照ノ作也

是ヨリ奥ノ能、いづれの代よりか自然ニ仕来ル。何ノ家ノ能か不知

班女。桜川。難波。雲林院。草苅敦盛。小袖曽我。女布苅。阿古木。半蔀。氷室。夕顔。梅枝。春永。帳郎。羅生門。小鍛冶。蟻通。鸚鵡小町。遊行柳。仏原。鞍馬天狗。

以上が大蔵作者付の内容である。計一五五番の曲に、世阿弥作を一曲も謬めず、最後に作者不明曲を21曲置いているほかは、すべて禅竹・宗筠・禅鳳・氏照・安照、及び大蔵道加の、金春大夫の一族を作者としているのであるから、内容的に信じ難いことは言うまでもあるまい。禅竹作の分に規範的な能を重点的に置いている観があるものの、宗印・禅鳳・道加の三人の分は、何に基づいて区別しているのか探る手がかりも見出し難く、格別の資料もないまま、勝手にでつちあげた作者付ではないかと思われる。前掲の伊達吉村の奥書によれば、大蔵常休は金春・大蔵両家の秘伝であると称してこの作者付を伊達綱村に相伝したらしいが、『自家伝抄』『金春八左衛門書上』及び『金春作者付』等の、金春系統の作者付と無関係である点から見て、金春家の秘伝と称するのは箔をつけるための工作に過ぎないのではなかろうか。収めている一五五曲が、享保頃の大蔵大夫家の所演曲目を主体とし、約十五曲の他流上演曲を作者不明分に加えた形のものであることも、この作者付が大蔵大夫家で作られていることを物語るかのようである。元禄頃、将軍が嫌いであつたために廃曲となつた鵜羽に「近代捨ル」と注しているから、作られたのは元禄～享保の頃であり、恐らくは大蔵常休の工作であろう。

信じ難い大蔵作者付の中で、橘を金春安照作としていることだけは信じ得ようか。橘が慶長九年の豊国神社臨時祭の際に金春座によつて新作上演された曲であることは、『能楽思潮』34号(40年11月刊)の片桐登氏の論に明らかである。当時の金春大夫は氏勝であつたらしいが、30歳未満だつた氏勝よりも、まだ健在であつた父の安照が主体になつての橘新作である可能性が強いようである。

因みに、作者の一人に擬されている大蔵道加は、大蔵作者付によると、禅竹の三男で、大蔵十郎と称し、名乗が秦信喜、法名が道加であるという。大蔵家伝来の説なのであろうが、とうてい信じ得まい。一体大蔵家は、南北朝時代に既に存在していたと見られる古い能の家であるが、代々の大夫は「八郎」と称したようであり、「十郎」は記録に現れない。禅竹の三男という説にしても、鼓の大蔵流の祖とされている大蔵九郎能氏を禅竹の三男とする説と混同しているようである。参考程度にしておくべき説であろう。

また、生田・六浦・沢瀧の三曲を氏照の夢中の能としているのは、禅鳳が夢見て五番の能を作つたという伝説が形を変えたものである。初雪と黒川(二曲とも禅鳳夢中の作と伝えられるもの)に右の三曲を合せた五番が、「禅鳳夢中の五番」かも知れない。

(41・2・26)